

# 学童保育における「気になる子ども」への理解と支援

—指導員へのコンサルテーションを交えた取り組み—

北九州市立大学 社会システム研究科  
地域コミュニティ専攻 2020M30005 鍋倉 功

## 【論文要旨】

学童保育には多くの「気になる子ども」が在籍しており、その数は障害児の数よりも多いと推測される。

「気になる子ども」は、子どもの現在の問題が何によってもたらされているのかが判断できず、子どもの行動を理解する視点や具体的な支援が見えにくい。また、診断を受けている障害児とは違って、ほとんどの場合、加配指導員もつかないため、指導員の手が足りないことや、保護者の理解や協力、また他機関からの支援を得ることも難しいことから、指導員は対応に大きな困難さを感じている。そのため、「他児に手を出す」等、学童保育の運営に著しく支障をきたす児童が退所させられてしまう事態さえ一部では生じている。それだけに、「気になる子ども」への理解を深めた上で、「気になる子ども」が子ども集団の中に包摂(インクルージョン)されるための取り組みが必要である。

「気になる子ども」に対する理解を深め、具体的な支援の課題と方法を確立していくことが必要だが、そのような研究はまだまだ少ない。また、「気になる子ども」との関わりで大きな精神的負担を抱える指導員への支援の取り組みも必要であると考えられる。

指導員への支援として、巡回相談へのニーズは高く、心理臨床等の専門家、近年では作業療法士によるコンサルテーションの取り組みも行われ始めている。しかし、指導員の専門性を養う上では懸念もあり、「指導員のニーズに応える」と「指導員の専門性を養う」ことの両方が可能となるようなコンサルテーションのあり方について検討をすることが必要である。

本研究の目的は、学童保育における「気になる子ども」の理解と支援について、先行研究や先行実践からその課題を整理するとともに、具体的な実践事例を検討していくことを通して、その課題の遂行のために求められる支援方針や実践方針を明確化することであった。また、その中で学童保育所におけるコンサルテーションのあり方に関してもあわせて検討した。

第1章では「気になる子ども」の行動特徴を踏まえながら、その背景となる諸要因を「アタッチメントの問題」「自我・社会性の発達のみならず」「発達障害」の視点から整理し、学童保育における支援の課題を整理した。また、学童保育におけるコンサルテーションの現状を整理し、学童保育の指導員の立場で行うコンサルテーションの方針についても提起した。

第2章では、筆者が関わった学童保育所における5事例について検討を行った。各事例では、第1章で整理した3つの視点から児童へのアセスメントと支援を行い、その成果と課題についての考察を行った。また、学童保育指導員としてのコンサルテーションの方針と課題についても考察した。

終章では、本研究の成果を踏まえて、学童保育における「気になる子ども」の理解と支援の課題について、また、コンサルテーションの意義と課題についての総合的な考察を行った。

本研究での結論は以下の通りである。

「気になる子ども」の理解については、その子どもが対応に困る行動をしている時にこそ、その行動の背景を丁寧にアセスメントすることが求められる。

「気になる子ども」の支援方針と実践方針については以下のように整理できる。

- ・「アタッチメントの関係づくりとそれを通じた感情制御の力の獲得」のためには、指導員がアタッチメント対象になるために「スキンシップ」「話を聞く」「物理的安全基地を保障しながら指導員を心理的安全基地として活用できるように援助していく」「まっすぐにヘルプを出せるようになる」「探索活動の中での『聞いて』『見て』に応答する」「子ども自身が自分の不快感情を言語化できるように援助していく」ことが重要である。
- ・「自我・社会性の発達援助」では、「生活や遊びの中で、『できた!』と肯定的な自分を感じられるような援助を行うこと」「異年齢集団での関わりの中で、『なりたい自分』という憧れを持ち、誇りや自らの成長を感じ取れるような取り組みを行うこと」が重要である。
- ・「発達特性への配慮」では、「合理的配慮を行い肯定的な姿を引き出し、仲間から肯定的に評価される生活や遊びをつくること」「指導員が間に入りながら折り合いをつけていくこと」が重要である。

指導員による直接支援を交えたコンサルテーションの意義は以下のように整理できる。

- ・指導員の労苦に寄り添うことが容易である。
- ・保育を援助しつつ、関わり方のモデルを提示できる。
- ・指導員の関わりへの肯定的評価により自己効力感を生み出せる。
- ・具体的な支援内容や活動を一緒に考えられる。

ただし、コンサルテーションを行う指導員には「指導員の苦悩への洞察力」「子どもと関わる専門的技術や実践知」「アセスメントするための専門的知識」が求められる。

次に指導員による課題については以下のように整理した。

- ・子どもの心理的安全基地の引継ぎ
- ・集団支援のスキルの伝達
- ・客観的なアセスメントと具体的な支援内容を考えることの難しさ
- ・学校との連携

また、その他の課題として、「指導員は『気にならない』子どもへの対応」「発達特性のある指導員への支援」をあげた。

最後に、今後の研究課題として、以下の課題を挙げた。

- ・学童保育に在籍する低・中学年の男児以外の子どもについても、検討していくこと
- ・気になる子どもの保護者への支援についても検討すること
- ・指導員を対象とした調査をすること
- ・多職種連携によるコンサルテーションについても検討していくこと